

研究ノート

フィジカルイグザミネーションを用いた老年臨床看護論実習Ⅱの学習効果

The Learning Effect of Practical Training in the Gerontological Nursing Using the Physical Examination.

安田千寿¹⁾*, 北村隆子²⁾, 畑野相子³⁾

Chizu Yasuda, Takako Kitamura, Aiko Hatano

キーワード フィジカルイグザミネーション, 老年臨床看護論実習

Key Words physical examination, gerontological nursing practice

抄 録

目的 本研究では老年看護学実習Ⅱにおいて、学生がフィジカルイグザミネーションでどのような学びを習得しているのかを明らかにするとともに、実習までの他領域実習経験数に応じた学びの特徴を明らかにすることを目的とした。

方法 A大学の老年臨床看護論実習Ⅱでは実習初日の患者の状態・状況把握において、カルテを見ることなく学生自身の五感を駆使して情報を得る方法を導入している。A大学における老年臨床看護論実習Ⅱを受講した学生59名を対象に、この手法を用いての実習の学びのレポートに対しテキスト分析を行った。

結果 回収されたレポートは39名分(回収率66.1%)であった。テキスト分析の結果、対象の約1/4の使用にあたる9個以上の頻度で出現した単語は31個であった。単語同士の関係の深さより学びの内容を集約した結果、【実際-考える】、【カルテ-自分-五感-大切】、【患者-知る-必要】、【情報-できる-ない】の4つのグループが抽出された。これにより、学生は対象のアセスメントに必要な情報の構成を考え、情報収集の手段を考え、手順を考えていく過程の中で、対象の現状を理解するために必要な知識の大切さを学び、対象のもてる力を実際に関わって把握していく難しさや大切さを学んだことが明らかとなった。また、老年臨床看護論実習Ⅱまでに経験した他領域の臨床看護学実習数を「初期：0回～1回」「中期：2回～6回」「後期：7回～8回」とした場合、後期群は「先入観」「情報収集する」「接する」の記述が多いことが示され、実習後期の学生においては先入観なく高齢者本来の姿を見ることができたという学びが明らかとなった。

Abstract

Objectives The purpose of this study was to clarify what to learn by a physical examination in gerontological nursing practice, we determine whether their learning is characteristic by the number of past training experience.

Methods University A makes the five senses of student oneself act without watching a clinical record on the training first day and obtains information. In 59 students who attended clinical training of gerontological nursing practice in University A, we performed a text assay in analyzed a text of the learning that we obtained using this technique.

Results/Discussion The collected report was for 39 peoples (66.1% of recover rate). As a result of text analysis, the word that appeared at frequency nine or more was 31. We found what four groups of [Actually-Think], [Clinical record- Oneself-The five senses-Important], [Patients-Know- Need], [Information-Possibility-Impossibility] were done when we compiled a relevant word. Students learned importance of necessary knowledge through experience, it is about what kind of information is necessary, about how you gather information, about what do you gather information from. And the student learned importance and difficulty to understand what they can do. The latter term group of gerontological nursing practice was able to watch the true figure of elderly people without a preconception.

I. 緒 言

老年看護学が成人看護学から独立してから現在まで、老年看護学教育に関する研究数は増加している。平成21年度のカリキュラム改正によりその専門性の確立や教育内容の検討はさらに重要視されており、我々もこれまで看護基礎教育から臨床

実習における老年看護の効果的な学習方法を検討してきた(安田, 2010; 安田, 2012)。老年看護学で求められる学びには、高齢者を理解し、共感し、ケアの根拠を考え、やがてその知識を応用することが上げられ、講義と演習と実習の学習視点や目標が一貫性を持つような指導を目指している。A大学では3年次から4年次にかけて老年臨床看護

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

²⁾ 京都橘大学 看護学部 看護学科 Faculty of Nursing, Kyoto Tachibana University

³⁾ 滋賀医科大学 医学部 看護学科 Faculty of Nursing, Shiga University of Medical Science

*E-mail : yasuda@c@seisen.ac.jp

護論実習において、学内で履修した科目を統合して臨む場と位置づけている。実習ではこれまでの学習理解をもとに、対象高齢者の刻々と変化する状態を目の当たりにし、たくさんの情報を得てそれを活用していく場である。従ってこれまでの知識を最大限に引き出す方法、対象高齢者に直接触れ確かめる機会を活かす方法、多方面から多くの情報が得られる方法を教育の中に取り入れていくことが必要だと考えられた。そこでA大学では、老年臨床看護論実習の後半実習Ⅱの初日の患者の状態・状況把握において、カルテを見ることなく学生自身の五感を駆使して情報を得る方法を導入している。それに伴い、学生は事前に、患者を統合的に捉えるためのアセスメントに必要な情報の構成を準備し、情報収集の手段を考え、手順を考えて実際に行動を起こさなければならない。山内はフィジカルイグザミネーションを「事実の探索・確認」と定義し、それを基に意味づけをするフィジカルアセスメントの一要素と述べている(山内, 2007)。実習では疾患から出現される症状を予測し、症状に関連する生活要因・精神要因を考えた上で、対象高齢者の身体に触れて情報を確認していることから、A大の老年臨床看護論実習Ⅱで用いる情報収集には、フィジカルイグザミネーションの手法が取り入れられていると捉えられた。しかし、カルテに頼らずフィジカルイグザミネーションを実施している方法は評価するには至っておらず、先行研究においてもこの情報収集方法を取り入れた実習効果はこれまで明確に存在しない。また老年臨床看護論実習Ⅱの課題を習得するには、対人関係技術や学習態度形成の力も必要となる。これまでの研究において、老年臨床看護論実習Ⅱの課題達成のために、領域を超えて経験する基本的な実践能力の形成が影響すること、さらに実習時期に応じて学びが異なること(佐藤ら, 2009)が示されているが、フィジカルイグザミネーションと実習時期の関係については明らかな文献が見つからない。よって本研究では老年臨床看護論実習Ⅱにおいてフィジカルイグザミネーションでどのような学びを習得しているのかを、学生のレポート上に高頻度に現われた単語を抽出することにより明らかにするとともに、実習までの他領域実習経験数に応じた学びの特徴を、経験群における比較分析により明らかにすることを目的とした。

用語の操作的定義

本研究においては以下のように用語を定義し、用語の解説を補足する。

フィジカルイグザミネーション：本研究では対象の身体機能を把握する為に必要な事実の探索・確認とし、それらの情報により、対象の身体的な症状の原因を心理的および社会的方面からも統合してアセスメントできるものとする。

Ⅱ. 方法

1. 対象

対象は、A大学で3年次から4年次に行われる老年臨床看護論実習Ⅱを受講した学生59名とした。

2. A大学の老年臨床看護論実習Ⅱの概要

A大学では3年次から4年次にかけて、成人Ⅰ、成人Ⅱ、母性、小児、地域、在宅、ターミナル、老年、の領域別臨地実習が行われ、学生は所属するグループにより領域実習を経験する順番が異なる。老年臨床看護論実習は3単位で、介護老人保健施設で1週間学ぶ老年臨床看護論実習Ⅰと、病院の療養型病棟に2週間かけて行われる老年臨床看護論実習Ⅱとで構成される。

今回調査をしたテキストは、老年臨床看護論実習Ⅱでの学びのレポートである。老年臨床看護論実習Ⅰで高齢者の特徴を理解したうえで、疾患を持った高齢者の看護を学ぶのが老年臨床看護論実習Ⅱのねらいである。この実習ではこれまでの実習指導の経験を踏まえ、実習初日の能動的な情報収集と多面的な患者との関わりを強化する為、実習初日にはカルテを見ないで情報収集をする方法をとっている。そのため学生は、実習初日までに必要最小限に与えられた情報(疾患名、安静度、介護度、現状のADL)をもとにして、実際に対象に出会って獲得しなければならない情報と、そのためにどのような方法をとらなければならないかを考えてくるのが課題である。実習2日目よりカルテを閲覧できるが、それまでも実習指導者に直接尋ねれば必要な数値などは提示されるようになっている。

3. 調査内容

老年臨床看護論実習Ⅱにおける学びのレポートの内、「実習初日は五感のみで情報収集を進めま

したが、そこから学んだことや感じたことはありましたか」に対する回答を分析し、学びの内容を明らかにした。

4. 調査期間

平成23年10月～平成24年6月までの実習期間中に、学生は2週間の老年臨床看護論実習Ⅱを行い、学生各自が実習最終日に学びのレポートを記録する。レポート回収は、平成24年10月の2週間で行った。

5. 分析方法

レポートから学びを分析するに当たり、学生が知識面、情緒面、価値観等さまざまな視点の学びを深めると推察し、その中で使用した言語をそのまま表現すること、分析対象人数が多いことより、テキスト分析を用いる方法を選択した。

- 1) 学びのレポートをテキスト分析した。分析にはSPSS Text Analysis for Surveys 4.0を用いた。これにより学生1人のレポート内に出現した単語と、対象学生全体でその単語が何回出現したかが明らかとなる。この手法では1人のレポート内に繰り返し単語が使用されても、その単語自体は1人につき1回とカウントされる。
- 2) テキスト分析により明らかとなった高頻出の単語について、対象学生を行、頻出単語を列とし、その単語を選択していれば1、しなければ0と表現する01型のデータのクロス集計表とみなし、コレスポネンス分析を適用した。コレスポネンス分析は2次元分割表で表わされる2つの変数のカテゴリの中で似たものを探し、分類する手法である。これにより、複数の単語の類似度を指標に分類し、単語同士の関係を表した。統計解析にはIBM SPSS Statistics 21.0, SPSS Categoriesを使用した。
- 3) 老年臨床看護論実習Ⅱまでに経験した他領域の臨床看護学実習数を「初期：0回～1回」「中期：2回～6回」「後期：7回～8回」として調査し、テキスト分析により明らかとなった高頻出の単語について、列とみなしてコレスポネンス分析した学生間の関係において、実習経験数の情報を学生1人1人に置き換えて層別した。これにより経験実習数同士の関係を表した。統計解析にはIBM SPSS Statistics 21.0, SPSS Categoriesを使用した。

6. 倫理的配慮

研究の趣旨と内容および、研究への参加は任意であり参加に同意しないことをもって不利益な対応を受けないこと、参加に同意した場合であっても、不利益を受けることなくこれを撤回することができることを保障する内容を書面と口頭で説明した。研究への参加の呼び掛けは単位認定終了後に実施した。分析する実習レポートは学生に返却した後、同意を得られた者だけ氏名を消した上でポスト投函にて回収した。なおこの研究は聖泉大学および滋賀県立大学の倫理審査委員会の承認を得て行った。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

回収された学びのレポートテキストは39名分（回収率66.1%）であった。そのうち、老年臨床看護論実習Ⅱが初めて、もしくはそれまでに他領域の実習を1回経験した学生（以下「初期群」とする）は11名、他領域実習を2回～6回経験した学生（以下「中期群」とする）は15名、他領域実習を7回～8回経験した学生（以下「後期群」とする）は13名であった。

2. 自由記述のテキスト分析により抽出された単語

39名分の学びのレポートテキストから、名詞・動詞・形容詞・形容動詞を抽出した。

抽出された全単語のうち、対象の約半数が使用したとされる20個以上出現した単語は、【情報 (33)、できる (32)、患者 (29)、カルテ (24)、ある (24)、五感 (22)、情報収集する (21)、くる (20)、感じる (20)】の、9単語であった。対象の約1/4の使用にあたる9個以上の頻度で出現した単語は、上記に加え【する (18)、自分 (18)、接する (17)、持つ (17)、いう (16)、思う (16)、大切だ (16)、ない (16)、得る (15)、確かめる (15)、先入観 (14)、コミュニケーション (12)、知る (11)、実際 (11)、必要 (11)、多く (11)、どんな・どのような (11)、わかる (10)、考える (10)、中 (10)、使う (9)、症状 (9)】の31個であった。(図1)

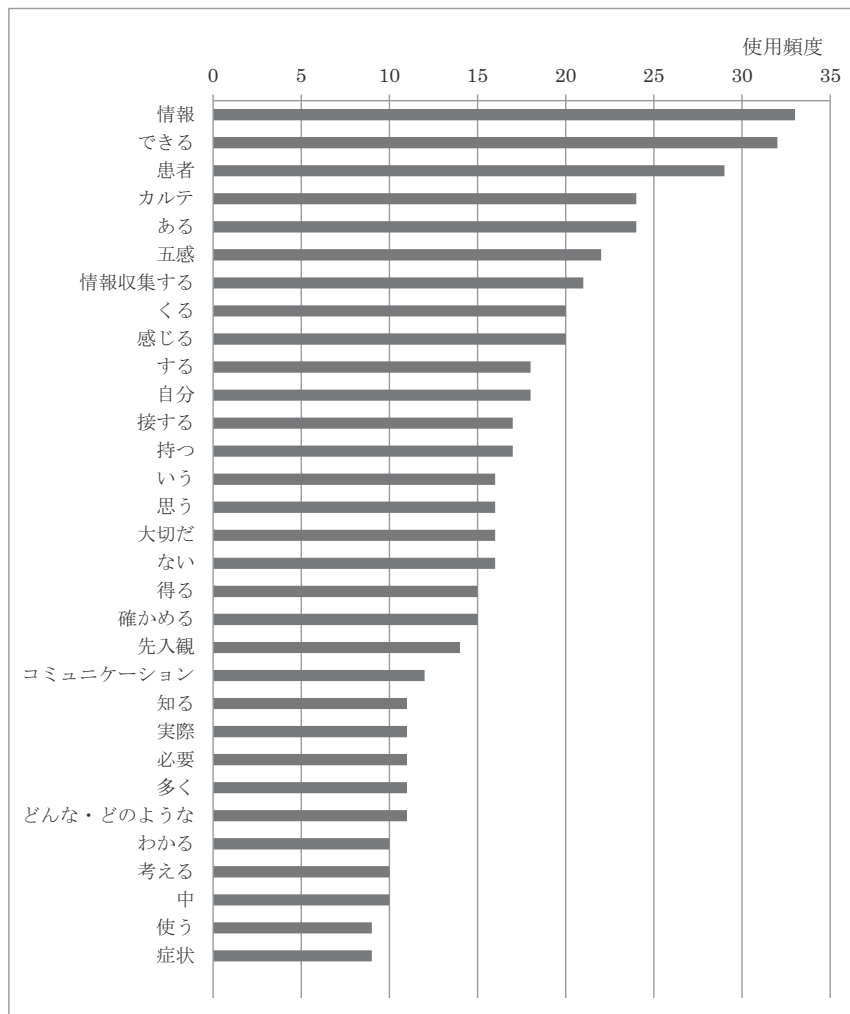


図1 9個以上使用された単語とその頻度

3. 単語間の関係性

9個以上の頻度で出現した31単語において、それらの単語同士の結びつきを検証した。図2は単語を列とする列スコアの布置図において、各単語間の関係性を表現している。(図2) コレスポンデンス分析では、行および列のカテゴリー間の距離が近いほど項目間の類似性は高くなる。よってグラフ上で明らかに近く位置する単語同士をグループ化した。これより、出現した単語は4つのグループにまとめることができた。グループ①は【実際-考える】、グループ②は【カルテ-自分-五感-大切】、グループ③は【患者-知る-必要】、グループ④は【情報-できる-ない】であった。また、コレスポンデンス分析では次元1と次元2の原点から遠くに位置するほど少数派であることを示す。よって原点からの距離より、グループ④は単語の出

現頻度が全体的に高い単語が関係していることが明らかとなった。この単語間のグルーピングの検証に至っては、頻出された31個の単語を手がかりに元のテキストデータの一部をランダムに選択し、文章を読んで全体を要約した結果とテキスト分析の結果が一致するかどうかを行った。(表1)

4. 実習経験数別学生間関係性

図2で示した列スコアに対して行スコアは対象同士の関係をみているが、そこに対象者の実習経験数で群別した情報を加えると、図3のようになった。(図3) 初期群および中期群は明らかな傾向が認められなかったが、後期群は次元1軸がマイナスおよび次元2軸がマイナスの方向に偏っていることが明らかとなった。これにより実習後期群にのみ特有の特徴があることが示唆された。

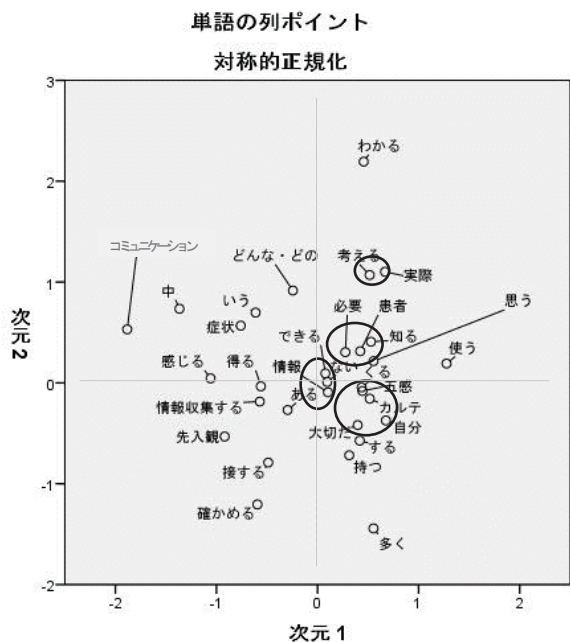


図2 単語の布置図 (コレスポネンス分析)

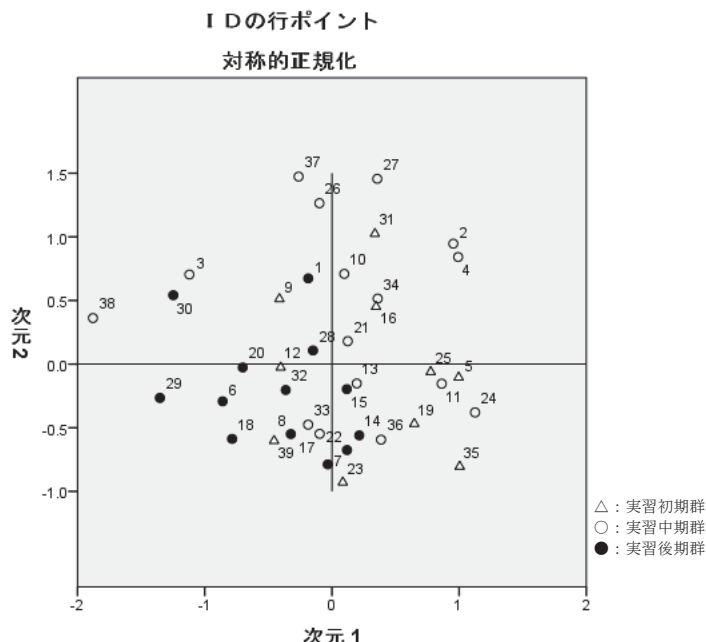


図3 対象の布置図-実習経験数の情報を付加 (コレスポネンス分析)

表1 頻出単語が使用された学びのレポート文章の一例

ID	文章例	内容	
1	今までの実習で自分の五感で情報を収集できるものでも、カルテに頼っていたのだと気づきました。また、カルテからの情報よりも、今自分で収集できた情報のほうが新しくもありました。事前に膝関節痛があるのは情報としていただいていたけれど、その程度やどんな時、どんな角度で痛むのかなど、 実際に 見るほうがよくわかり、それにより何に困っているのかを 考える 事ができました。	16	カルテからの情報収集ではなく、受け持ち患者を見て、話を聞いて、その人を理解しようとする事で、理解するにはどんなことを 知る 必要があるのか考えることができた。おおまかな 情報 のみを持っていて、その人には、こんなことができるかもしれないと考えを膨らませ、 実際 にお会いすることで、その想像通りだったりそうで なかった り、考えていた状態と違う部分が見つかった。考えていた状態と違うという点では、自分の考え方が偏ったものであったこともわかった。また、 実際に 五感を用いることで得られた情報は自分で得た情報であるので、アセスメントなどに自信を持つことができた。
2	何より、 実際に 高齢者の方と接しながら情報を集めるわけで、その方の思いや認知のことが接しながら 考え 、その時の表情からも感じ取ることができた。五感を精一杯使うとすごく疲れることもわかりました。	26	何かを聴いたり、見たり、行ってもらったり、その人を知るために必要な事が何かを考えるのが大変でした。カルテがなくても患者さんのことを知ろうと思ったらある程度知ることができると思った。高齢者だからという思い込みから入ってしまうと、聞かないといけないことが聞けないとわかりました。 実際に 触れてみたり、話したりしていく中で、その人だけを見ることで何ができなくて、何ができるか、不自由なことはいかにじっくり考えられる機会になった。コミュニケーションが苦手なので、難しかったです。
4	今まではカルテからの 情報 に頼りっぱなしだったため、患者さんが 実際に どこまで できる のかがあまり把握できて いなかった 。今回の実習で 自分の五感 で情報を集めたことでより患者さんの状態について把握できたと思う。知りたい 情報 について、どのようにして情報を収集していくか、その手段についても今回の実習で考えたり、学んだりできたので、この経験を大切に して 次回の実習で行っていきたいと思う。	31	必要な 情報 は何かということについて深く考えられることができた。いつも与えられた 情報 だけに頼っているということを実感した。話をすることに意識がいき、患者がどのような動きをしているのか、何を見ているのか、観察をすることがおろそかになっていた。患者に寄り添った援助を考えるには生活を知り、環境を知り、気持ちを知ることが 必要 だとわかった。生い立ちについて知ると患者の理解ができるので傾聴する姿勢も大切だと感じた。
8	前回までの実習ではカルテである程度 情報 を得てから患者さんと接していたので、初めに自分で患者さんはこんな人だと決めてしまっていたところがあったと感じた。今回は一日目に五感のみで 情報 収集を行ったため、先入観なく接することができた。また、自己紹介をして患者さんの名前を聞き、互いの 情報 を伝え合うという当たり前のコミュニケーションをとることができ、今までの関わりを見直すことができた。いつもより慎重に患者さんの様子を観察したり言葉聞き取りすることで気づくことがたくさんあったため、 カルテ に頼るのではなく 自分の五感 を使った 情報 収集が重要であると学んだ。	18	五感のみで 情報 収集を実施したことで、ADLの状況や身体の可能性の状況について 先入観 を持たず、その人がどこまで できる のか できない のかを自分の目でしっかりと確認することができた。また、コミュニケーションをとることで、その人の今まで生きてきた歴史や思い出について語ってもらい、それを本人がどう感じておられるのか、痛みなどにどう影響しているのかを理解できた。しかし、認知症もある方であり、その人の発言がすべて確かな 情報 であるというわけではなかったため、疾患や治療、家族の状況等に関しては、カルテや家族の話などから判断していくことも重要であると学んだ。
13	そこで感じたのは患者さんが話すことの一つ一つがとても新鮮な感じがして、直接患者さんから聞くことは自分が得た 確実な情報 であるので大切なことだと感じた。話を聞くだけでなく、 実際に 体を動かしてもらって、触れたりして、患者さんのことを知ろうと思うと何の 情報 が必要なのかということをもっと考えておくことも大切だと学んだ。	28	カルテから 情報 を得てから高齢者と関わると 先入観 があったように思う。今回はどんな生活をされているのかどんな 症状 を持っているのかを 考え て関わることができた。意図的に 情報 をとることの大切さを学ぶ事が出来た。しかし、認知や記憶面については自分が持っている 情報 が正しいのかと不安になることもあった。自分の持っている 情報 とカルテの 情報 を総合して患者を見ていくことが必要だとわかった。いろんなところに気配りして、 敏感 に 情報 収集する必要があると感じた。
14	これまでは カルテ を先に見て 情報 収集していましたが、五感のみで得られる 情報 に大切な人らしい 情報 が つま っていて、 五感 から自分で 情報 を得ることの 大切 さを改めて知りました。高齢者では、 症状 がどの程度で、それによって何が 難しい のか、何が できない のかを自分で見て触って、聞くことで、その人が持っている体の特徴を 実感 できる。これから高齢者のみではなく、成人、小児様々な方と関わる機会があると思いますが、自分の目で見て、触れて聞いてどうなっているのかを感じることを大切にして、感じたことからその人らしさを十分に尊重した 関わり や 援助 をしていきたいと思います。	29	手探りの 情報 収集という感じだったが、過去ではなく現在の患者像ということが見えた。自分の目で確認でき、 確かな情報 を捉える事ができた。 先入観 なく自分の得た 情報 の中での会話だったため、本来あるべきコミュニケーションの取り方だと感じた。自分の力で、 情報 をつかみに行ったという思いがある。

IV. 考 察

1. 学びの特徴

単語間の関係より、学生の学びの記述には4つの特徴があると考えられた。このグルーピングの検証作業で行った全体の要約を踏まえて考察するものとする。

グループ①では「実際」と「考える」の2つの単語から構成された。この二つの単語は10名以上の学生が使用しているが、「実際」に続く単語は多岐にわたり、学生は実際に見たり、触れたり、話したり、関わったり、接したりと多くのアプローチを実践していることが表現された。いずれも学生自らアクションを起こすことで、目の前の高齢者そのものをより深く感じ取ろうとする動きがあったと捉えられた。また、「実際」に症状があるのか、「実際」はどこまでできるかを「考える」という表現の仕方も多数見受けられた。この実習では実習初日までに学生に伝える対象の情報は必要最小に限り、年齢・既往歴・現病歴・高齢者が受けている現在のADL介助の情報を実習前週に提示している。この情報を通して、心身に何が起きているのか、どういった生活をされているのか、どのような困難を抱えているのかを推測する課題を出している。この課題により疾患の基礎知識や高齢者の心理的な変化、高齢者の生活動作といったこれまでの学内での知識を統括することがねらいである。今回「実際」「考える」の二つの単語が頻出したことは、実習までの知識をもとに実習初日にはどのような情報をつかむ必要があるのかを考え、その情報の確かさを定めていく方法を考えていくという学びが示された。

グループ②は「カルテ」「自分」「五感」「大切」の4つの単語で構成されていた。カルテを見ることから始めたこれまでの実習方法と比較し、五感を駆使して自分が何をすべきなのかを考えながら高齢者と関わること、情報を獲得していくことの大切さに気づいたことが表現された。今まではカルテの情報に頼りきりで、高齢者の前にいても話をしているにもかかわらず大切な情報がたくさんあるとは思っていなかったという内容も多くあった。

五感を駆使して得る情報がカルテの記載事項よりも新しく、対象の現状に即していること、また日々全力で対象に向き合っていくことで対象との関係が深く良好に形成されることが看護において

大切なことだという学びが示された。

グループ③は「患者」「知る」「必要」の3つの単語で構成されていた。患者によりよいケアを提供するには、生活や環境や気持ちを知ることが必要になることと、患者を理解するために必要な知識は何かを知ることの二通りの意味合いが含まれていた。看護のケアを提供するまでには、高齢者看護に限らず看護過程の展開が必要である。学生は看護過程を踏まえて実践をし、対象から反応を得てさらに修正を加えていくのであるが、患者が抱える症状や反応の原因をたどるために、計画立案、立案をするためのアセスメント、アセスメントをするための情報収集とさかのぼって修正を加えていくことになる。木立らが述べているように、看護過程の中で学生が最も困難を感じ自信を持っていないプロセスは、情報収集と情報の解釈である(木立ら, 2011) ために、この修正の作業を通して情報の足りなさや解釈の足りなさを埋めていくことが重要な学びに繋がる。学生の記述からは修正作業を通して、正確に深く知ることが良い実践につながることで、つまり情報把握の重要性を感じ取っていったと考えられた。また疾患の症状、加齢の影響などの知識を持つことで、なぜそのような行動変容が起きるのか等、生活レベルでの高齢者の理解に繋がることを実習で体験できたと捉えることができた。

グループ④では「情報」「できる」「ない」の3つの単語で構成され、高齢者の持っているできる力を情報として得ること、初日にカルテを見なくても自分で情報が得られたという達成感、反対に知りたい情報を得ることが困難であったことが示された。高齢者の持てる力に着目するにあたり特徴的なのは、高齢者は個々多少なりとも身体的な機能の衰退が認められることである。その上でその人の持っている力を最大限に引き出すことは自己効力感を増し、その人がこれまでの自分らしさを保ちながら過ごすことを支援することに繋がる。実習を通して、もてる力を把握し活かすことを学んだと捉えられる。しかし、持てる力を知る必要性を強く感じながら、学生自身の力ではうまく情報が得られないという内容が表出されていた。自ら能動的に情報を獲得していかなければならないこの実習体系において、高齢者にどのようにアプローチしたら能力が把握できるのか、その手段を考えることと実践していくことは学生にとって困

難な課題だったことも伺えた。高橋らは老年臨床看護論実習の初期に学生が直面する困難の中で「できることを観察する視点がわからない」という内容を明らかにしており、指導者の意図的な投げかけや観察への促しが重要であると述べている(高橋, 2009)。今回の調査からも実習時期は限定されないが同様の傾向が示され、指導のあり方に再考が必要であると考えられた。

これら4つの学びの特徴は、布置図上の距離が近いことからわかるように互いに関連しあっていることが伺えた。学生は対象のアセスメントに必要な情報の構成を考え、情報収集の手段を考え、手順を考えていく過程の中で、対象の現状を理解するために必要な知識の大切さを学び、対象のもてる力を実際に関わって把握していく難しさと大切さを学んだと考えられる。

この実習においては初日に限らず、カルテの情報を超えて事実確認をさせながらアセスメントにつなげていくことを指導しており、能動的に探索的に情報収集することで必要な情報とは何かを考えるきっかけになっていると思われる。

2. 実習経験数と学びの関係

頻出した単語31個と実習経験数との関係において、実習後期群にのみ図の左下に固まって位置するという特有の特徴がみられた。列スコアの単語の布置図と合わせて検証すると、実習後期群には「先入観」「情報収集する」「接する」の記述が多いことが示された。これらの単語同士には強い関連がなく、意味をなすまとまったグループはできなかったが、頻出した個々の単語は学生の実習時期による学びの特性があると考えられ、もっとも特徴的だと思われる単語は「先入観」であった。抽出した単語を手掛かりにテキストに戻って内容を検討した結果、カルテからの情報収集から看護過程を開始した場合、先入観をもって対象患者と接していたという振り返りの記述と、今回の実習において先入観なく高齢者本来の姿を見ることができたという記述内容が多く認められた。

この「先入観」の形には2つの事が考えられた。一つは、実習を経験するごとに疾患を持つ対象の事例が増え、その症状に従って入院施設内での生活様式を予測する力がついてきたことより、新たな対象にもそのイメージを当てはめるという先入観の形である。従って実習後期群が先入観を持ち

やすいのは、予測する力がついた証とも捉えられる。しかし疾患のみの切り口で対象を予測したり、日々刻々と変化する対象の状態を無視してカルテの記載からイメージを形成していくと、誤った対象の捉え方をするという学びの表れが今回認められたと捉える。

もう一つは臨地実習先の職員から受け取る先入観の形である。カルテの記載情報には実習機関の経験豊富な看護師が専門的な目で集めた情報と、アセスメントに従った現在進行形の看護計画があり、計画の実践に対する対象のこれまでの反応を見ることができる。従ってカルテを先に見る場合、学生は看護過程を展開する課題に際し、既に平行して看護が展開されているのを知っていて臨まなくてはならない。そして学生は模倣を通して看護を学んでいくことになる。看護学実習における学生の学習活動の7つの概念には、模範の発見と同一化が示されており、臨床指導者や教員等の豊かな技術や広範な視野でのコミュニケーションを模範とすることで自己の技術と比較し同一化を図るという点で効果的であると述べている(杉森, 2009)。ただしこの模範とは看護技術や対象に対する態度に対してであり、看護診断や計画内容そのものを模倣することや、看護師各々の価値観に従った患者像を模倣することとは異なると考える。高木は実習初期の段階で学生がカルテに書いてあることを鵜呑みにし、表面的な事柄で理解する傾向にあると述べており(高木, 2003)、実習初期の学生に対する指導のあり方を指摘している。心細いばかりの実習初期には、臨地で実際に行われている看護の見本を示すことで学生の看護観を育て、看護過程の展開を覚えていくきっかけになると考えられるが、今回の調査で、初期を過ぎ実習で基礎的な能力を身につけてきた時期でも同じ指導方法でよいのかという課題が明らかになった。模倣が継続しすぎると現場スタッフが行うケアの根拠や理由を考えずに、看護師の看護を「正解回答」として従う傾向が付き、今後の学生の学習の発展には繋がらないと考える。今回後期群の学生からは、実習初日における情報収集の模倣材料がなく不安を感じながらも、自らの力で対象を理解していった満足感が伺え、実習を通して徐々につけた看護の力を発揮しようとする特徴が示された。今回初めから模倣の教材を与えなかったことで、積極的な対象理解と学びの姿勢が示された

ことは評価できると思われた。これを軸としてさらに自ら考え、対象を理解していく意欲的な姿勢の大切さを理解すると共に、実際に満足できるアプローチができ、十分な情報が収集できるという結果を伴えることが必要だと思われる。模倣する学習形態は実習を積み重ねていく段階に応じて、方法を変化させる必要性が示唆された。

V. 結 語

今回の調査で4つの学びの特徴が明らかになり、実習後半における学びの特徴が示された。これより事前に情報獲得における必要な情報の構成を考え、実践して情報を集めることが高齢者の状態を深く理解できること、高齢者の持てる力を含め、現状をよく知ることが実践的なケアにおいて有用であること、初日にカルテを見ないでおくことは、実習後期の学生にとっては先入観なく学生の能力を発揮させるのに有用であることが考えられた。今後は学生自ら考え対象を理解していく意欲的な姿勢の重要性を理解すると共に、実際に満足できるアプローチができ、十分な情報が収集できるという結果を伴えるような教育方法が課題であると示唆された。

謝 辞

本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力いただいたA大学の学生の皆様に心より感謝いたします。また、ご繁務の中ご協力いただきました滋賀県立大学の本田可奈子先生に厚くお礼申しあげます。

文 献

- 木立るり子, 米内山千賀子, 工藤恵 (2011) : 老年看護学実習における学生による自己評価の特徴と教育への活用, 日本看護額教育学会誌, 20 (3), 47-56.
- 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子 (2009) : 看護教育における授業設計 第4版, 106, 医学書院.
- 杉森みどり, 舟島なをみ (2009) : 看護教育学第4版増補版, 264, 医学書院.
- 高橋順子, 林裕子 (2009) : 老年看護学実習の初期における学生の困難: 疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点, 看護総合科学研究会誌, 11 (2), 15-23.
- 高木初子 (2003) : 老年看護額において学生が身につけた実践知としての看護援助能力-意識的な振り返りを通して-, 自治医科大学看護学部紀要, 1, 55-67.
- 安田千寿, 畑野相子, 北村隆子 (2010) : 老年看護学教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因 (第3報), 人間看護学研究, 8, 57-66.
- 安田千寿, 畑野相子, 北村隆子 (2012) : 学生の実習経験と老年看護実習における学びの特徴-テキストマイニングによる自由記述回答の分析, 人間看護学研究, 10, 95-100.
- 山内豊明 (2007) : フィジカルアセスメントを正しく推進するにあたって, 看護教育, 48 (6), 470-477.